

論文

日本における外国人旅行者のパークラン観光に関する研究

石盛 真徳

Masanori ISHIMORI

キーワード：スポーツツーリズム、パークラン観光、参加動機、異文化交流

問題

2004年10月に英国ロンドンで開始された5kmのラン／ウォークイベント「パークラン」は、英連邦諸国や欧州を中心に拡大し、現在では世界23カ国4,712会場で毎週土曜日に開催されている（parkrun.com, 2025）。発祥地である英国をはじめ、オーストラリアや南アフリカなど広く普及している国々では、パークラン参加者や運営ボランティアを対象とした研究が活発に行われている。研究テーマは多岐にわたり、公衆衛生介入としての可能性の検討（e.g., Haake, 2018; Quirk et al., 2021; Stevinson et al., 2015; Stevinson & Hickson, 2013）、ウェルビーイングへの影響（e.g., Grunseit et al., 2018; Reece et al., 2019）、社会的不平等との関連（e.g., Schneider et al., 2019; Wiltshire et al., 2018）、さらには運営ボランティア活動の特性や役割（e.g., Ashdown-Franks et al., 2023; Renfree & West, 2021）などが報告されている。日本では、2019年4月に東京都世田谷区の子玉川公園で初めてパークランが開催され、コロナ禍による一時的な停滞はあったものの、現在では全国50会場に拡大している（parkrun Japan, 2025）。この普及に伴い、日本国内でもパークランの普及状況や参加者の特徴に関する研究成果が報告されているようになった（石盛, 2024; 中川他, 2024; 東條他, 2024）。しかし、先行研究で十分に検討されていない領域として、パークラン参加と観光を結びつけたスポーツツーリズムの領域が存在する。パークランへの参加が観光旅行の目的の一つとなり得ることは、比較的早い段階から注目されており、パークランは公式パートナーとして英国のランニング・アドベンチャー旅行専門会社Exodus Travelsを認定している（parkrun.com, 2017）。同社は、休暇先での地元パークランイベントへの参加を推奨するとともに、観光者向けに多様な情

報を提供している。具体例として、イベント名称の頭文字をAからZまで収集する「アルファベット・チャレンジ」に対応するイベントを紹介するなど、パークラン観光の実践を積極的に促進している（Exodus Travels, n.d. a; n.d. b）。このチャレンジの達成はランニングコミュニティにおいて高い名誉とされ、一部の参加者にとって大きな動機づけとなっている。また、アルファベット・チャレンジに関する書籍（Jones, 2023）やガイドブック（King, 2021a, 2021b）が出版され、Facebookのグループ「parkrun Tourism」には5.2万人が参加して情報交換を活発に行っている。

一方、研究面においてはパークラン観光に関する検討はほとんど行われていないが、McKendrick et al. (2020) は van Rheenen et al. (2017) によるスポーツツーリズムの分類枠組みに基づき、パークラン観光の特徴を整理し、その必要性について指摘している。同研究では、スポーツツーリストを以下の4つの軸に沿って分類可能とする。すなわち、（1）動機（非プロフェッショナルの場合は排他的動機、主要動機、副次的動機、さらにプロスポーツ選手が仕事で自宅を離れている際に非プロのスポーツ活動に従事する場合）、（2）イベント起因性の有無、（3）参加形態（能動的参加か否か）、（4）滞在形態（宿泊を伴うか否か）である。そして、これら4つの軸の組み合わせにより導出される32種類のスポーツツーリストのサブタイプに対応して、パークラン観光の具体的事例が示されている（McKendrick et al., 2020）。日本においても、パークランへの参加を旅の目的の一つとする外国人参加者は一定数存在する。たとえば、大津のサンシャインビーチ・パークランでは、参加者の多くがインバウンド観光客であることが確認されている（石盛, 2024; 東條他, 2024）。さらに、中川他（2024）の首都圏におけるパー

クラン参加者調査では、海外からの旅行者との交流が行われていることが明らかにされている。これらの事実は、日本においてパークランとスポーツツーリズムの関連性を探る先進的研究の実施が可能であることを示唆している。以上を踏まえ、本研究では、日本におけるパークラン観光の実態を明らかにすることを目的として、日本国内のパークランに参加経験を有する外国人旅行者を対象とした調査を実施する。観光目的で訪日するインバウンド観光客にとって、週に一度土曜日の朝に開催されるパークランイベントを旅行の主目的とする可能性は低いであろう。したがって本研究の対象者は、McKendric et al. (2020) の4つの軸に基づく分類において、(1) 副次的動機としてのパークラン参加、(2) イベント参加型、(3) スポーツ参加者、(4) 宿泊を伴う、に該当する層と位置づけられる。本研究は、そのような参加者を対象に、日本におけるパークラン観光の基礎的知見を収集・整理することを目的とする。

方 法

調査手続き：研究では、Facebookにおいて日本のパークランに参加を希望する外国人旅行者に向けて情報提供を行っているグループである「parkrun Japan Tourists」の管理者の協力を得て、メンバー 1,307名およびその友人に対して調査への協力を呼びかけ、オンライン形式の調査を実施した。調査への回答の前に、研究協力者には、調査目的、データの利用範囲、匿名化処理、撤回権などを十分に説明し、調査協力への同意を確認した上で参加してもらった。なお、説明および質問紙は英語で作成されたものを用いた。なお本研究は、JSPS科研費JP23H03645の助成を受け、追手門学院大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号：2025-04）。

調査協力者：日本でのパークランの参加経験のある日本以外に居住する97名（女性68名、男性29名）より回答を得た。年代は、20代2.1%、30代14.4%、40代28.9%、50代35.1%、60代15.5%、70代4.1%であった。雇用形態はフルタイム66.0%、パートタイム12.4%、学生1.0%、主婦（主夫）3.1%、無職（年金受給者含む）17.5%であった。

調査期間：2025年5月に実施した。

調査項目：質問紙の調査項目は下記の通り、1. 個人的属性およびパークランへの参加経験に関する質問、2. 日本旅行に関する質問、3. 日本でのパークランへの参加経験および今後の参加意図に関する質問から構成した。

1. 個人的属性およびパークランへの参加経験に関する質問

①日本での旅行中のパークランへの参加経験の有無、②性別、③年代、④現在の居住国、⑤これまでのパークランへの参加回数、⑥初めてパークランに参加した時期、⑦これまでのパークラン参加国数、⑧雇用形態、⑨現在の暮らし向き、⑩パークランの運営ボランティア参加経験の有無、⑪パークランへの参加形態、⑫ランニングを趣味にしてからの年数、⑬10km以上の長距離走の大会への参加の有無（参加経験有の場合は、最も距離の長い大会のカテゴリー、フルマラソン完走者経験はそのタイム）

2. 日本旅行に関する質問

①パークランに参加したもっとも最近の日本旅行の年、②旅行期間の長さ、③旅行費用（交通費・宿泊費・飲食費等）、④旅行の同行者、⑤日本への訪問回数、⑥国外への旅行の頻度、⑦日本旅行の満足度（5件法：「1. 満足していない」～「5. 満足している」）、⑧日本旅行中のマラソン大会への参加の有無

3. 日本でのパークランへの参加経験および今後の参加意図に関する質問

①日本で参加したパークランイベント、②日本でのパークランへの参加を決めた時期、③日本でのパークランの情報の入手先、④日本でのパークランについての情報入手の困難さ（5件法：「1. まったく経験しなかった」～「5. かなり経験した」）、⑤日本でのパークランについての英語情報入手の困難さ（5件法：「1. まったく経験しなかった」～「5. かなり経験した」）、⑥日本旅行でパークランに参加することの重要度（5件法：「1. 重要でなかった」～「5. 重要であった」）、⑦日本でのパークラン参加前の経験に関する7項目（「イベントが予定通りに開催されるか不安だった」、「会場にたどり着けるか不安だった」、「日本語が話せないのが不安だった」、「イベントの雰囲気がウェルカムか不安だった」、「日本人のランナーやボラ

ンティアと交流することを楽しみにしていた」、「自分の国とは違う環境のパークランに参加することを楽しみにしていた」、「日本でパークランに参加することを楽しみにしていた」、5件法：「1. まったく経験しなかった」～「5. かなり経験した」、⑧日本でのパークランでの経験に関する6項目（「開催場所にたどり着くのに苦労した」、「適切なコース案内と誘導を受けることができた」、「外国からの参加者を歓迎する雰囲気があった」、「日本のランナーやボランティアと交流することができた」、「自分の国とは違う環境のパークランに参加できて満足した」、「日本でのパークランの経験に満足した」、5件法：「1. まったく経験しなかった」～「5. かなり経験した」、⑨今後のパークランへの参加に関する3項目（「また機会があれば日本でのパークランに参加したい」、「日本でのパークランについて友人に勧めたい」、「日本以外の外国でのパークランに参加したい」、5件法：「1. まったくそう思わない」～「5. 強くそう思う」、⑩自国以外でのパークラン参加に関する個人的な取り組みや目標について（自由記述）。

結 果

1. 個人的属性およびパークランへの参加経験

①調査協力者の居住国の割合は表1に示すとおりである。英国およびオーストラリアが全体の8割以上を占め、それ以外は主に英連邦加盟国およびヨーロッパ諸国であった。

表1 調査協力者の居住国

居住国	調査協力者 (%)
英国	35.1
オーストラリア	47.4
ニュージーランド	2.1
南アフリカ	2.1
アメリカ	2.1
アイルランド	3.1
オランダ	1.0
ポーランド	3.1
シンガポール	2.1
その他	2.1

調査協力者の「パークラン参加回数」については、「200回以上」が最も多く、全体の約半数を占めた（表2）。次いで「1～9回」が19.6%、「100～199回」が

17.5%であった。これにより、100回以上参加している熱心な参加者が全体の3分の2を超え、10回未満のライトな参加者は約2割にとどまっていた。また、「パークラン参加年数」についても、「5～9年」と「10年以上」を合わせて85%以上で、比較的長期間参加している層がほとんどを占めていた（表3）。

表2 調査協力者のパークラン参加回数

参加回数	調査協力者 (%)
1～9回	19.6
10～19回	3.1
30～49回	2.1
50～99回	8.2
100～199回	17.5
200回以上	49.5

表3 調査協力者のパークラン参加年数 (%)

参加年数	調査協力者 (%)
1年未満	2.1
1～2年	1.0
3～4年	11.3
5～9年	51.5
10年以上	34.0

「参加した国数」でも、「5カ国以上」が50.5%と半数を占めており、積極的にパークラン観光を実施しているという結果であった（表4）。

表4 調査協力者のパークラン参加国数

参加国数	調査協力者 (%)
2カ国	18.6
3カ国	20.6
4カ国	10.3
5カ国以上	50.5

「現在の暮らし向き」については、「経済的に安定している」が71.1%、「ある程度経済的に安定している」が24.7%であり、調査協力者の大多数が経済的に余裕のある層であった。「パークランの運営ボランティアへの参加経験」では、「有」が97.9%とほとんどを占めていた。ボランティア参加回数については、「20回以上」が76.3%と最も多く、「10～19回」6.2%、「6～9回」3.1%、「1～5回」12.4%であった。これらの結果から、

調査協力者の多くはランナーとしてのみならず、ボランティアとしても積極的にイベント運営に関わっていた。「パークランへの参加形態」については、「主にランナーとして」が78.4%と最も多く、「主にウォーカーとして」および「ランナーとウォーカーがほぼ半々」がいずれも10.3%であった。「その他」は1.0%にとどまった。すなわち、調査協力者の多くは主としてランナーとして参加しているが、ウォーカーとしての参加や、状況に応じて両方の形態をとる者も一定数存在していた。「ランニングを趣味にしている年数」については、「1～2年」が3.1%、「3～4年」が3.1%、「5～9年」が28.9%、「10年以上」が59.8%、「覚えていない」が5.2%であり、調査協力者の大多数が5年以上にわたりランニングを趣味として継続していた。調査協力者全体のうち、「10km以上の長距離レースへの参加経験あり」は88.7%と高く、多くの人々が長距離レースに参加した経験を有していた。参加したレースの種類は、「約10kmのレース」9.3%、「ハーフマラソン」29.9%、「フルマラソン」29.9%、「フルマラソンより長いウルトラマラソン」13.4%、「その他」6.2%であり、全体の4割以上がフルマラソンまたはそれ以上の長距離レースに参加していた。さらに、「フルマラソン完走経験あり」は40.2%であった。フルマラソンの完走タイムについては、「4～5時間」が19.6%と最も多く、次いで「5時間以上」および「3～4時間」がいずれも8.2%であった。

2. 日本旅行に関する質問

「パークランに参加したもっとも最近の日本旅行の年」については、2025年が57.7%と最も多く、次いで2024年が36.1%、2023年が5.2%であった。「旅行期間の長さ」では、「10日以上」が74.2%と圧倒的に多く、次いで「7～9日」が13.4%、「5～6日」が8.2%、「3～4日」が3.1%であり、ほとんどの調査協力者が一週間以上日本に滞在していた。「旅行費用（交通費・宿泊費・飲食費等）」については、「4000米ドル以上」が42.3%と最も多く、次いで「1000～1999米ドル」16.5%、「2000～2999米ドル」10.3%、「3000～3999米ドル」9.3%であった。滞在期間が一週間以上の参加者が8割を超えていることから、旅行費用が相対的に高額となる傾向が見られたと考えられる。「旅行の同行者（当てはまるものすべて選択）」については、「いない」が20.6%、「友人」が14.4%、「家族」が63.9%であ

り、家族旅行が最も多かったが、単独旅行者も一定数存在していた。「日本への訪問回数」では、「1回目」が47.4%と約半数を占め、次いで「2回目」18.6%、「3回目」10.3%、「4回目」5.2%、「5回目以上」18.6%であった。すなわち、日本を初めてまたは2回目に訪れる参加者が65%以上を占める一方で、4回以上の訪問経験を持つリピーターも2割程度存在していた。「国外旅行の頻度」については、「半年に1回以上」が43.3%、「年に1回程度」が38.1%と、定期的に海外旅行を行っている層が大半を占めていた。「2～3年に1回程度」は13.4%、「3年に1回未満」は5.2%であった。日本旅行の満足度は極めて高く、「5. 満足している」が96.9%、「4. やや満足している」が3.1%であった。また、「日本旅行中のマラソン大会への参加の有無」では、13.4%が「旅行中にマラソンに参加した」と回答した。参加大会としては、東京マラソンが10名、大阪マラソンが2名であり、いずれも海外からの参加者が多い大規模都市マラソンであった。これらの参加者は、日本旅行とマラソン大会の参加を組み合わせ、その滞在中にパークランにも参加していた。

3. 日本でのパークランへの参加経験および今後の参加意図に関する質問

①日本で参加したパークランイベント

調査協力者が日本で参加したパークランイベントのうち、参加率が5%以上であったイベントを表5に示す。日本で最初に開催されたパークランであり、東京都心からのアクセスも良好な二子玉川のイベントの参加率が41.2%と最も高かった。次いで、滋賀のサンシャインビーチおよび大阪の鶴見緑地の参加率がいずれも26.8%と高かった。これらはいずれも外国人観光客に人気の観光地である大阪や京都からのアクセスがよいイベントであった。なお京都においても、かつてパークランイベントの開催が企画されたものの、施設管理者の許可が得られず実現には至らなかったとの情報が得られた（2023年11月のサンシャインビーチのイベントディレクターへの聞き取りによる）。そのため京都に宿泊している観光客が、最も近隣の滋賀のサンシャインビーチのイベントに代替的に参加していると考えられる。ただしサンシャインビーチのコースは、図1に示すように風光明媚な琵琶湖畔に設定されており、今後京都でパークランが開催された場合でも、一定数の外国人観光客が同イベントに参加することが見込まれる。

表5 調査協力者が参加したパークランイベント

会場	参加率 (%)
二子玉川 (東京)	41.2
サンシャインビーチ (滋賀)	26.8
鶴見緑地 (大阪)	26.8
浦安市総合公園 (千葉)	25.8
光が丘公園 (東京)	21.6
新河岸川浮間 (東京)	19.6
淀川河川公園枚方地区 (大阪)	19.6
柴又公園花壇 (東京)	7.2
大磯運動公園 (神奈川)	7.2
桃井原っぱ公園 (東京)	6.2
柏の葉 (千葉)	6.2
名城公園 (愛知)	5.2
平城宮跡歴史公園 (Nara)	5.2



図1 滋賀のサンシャインビーチのパークランの様子
注：筆者撮影

②日本でのパークランへの参加を決めた時期

96.9%が「旅行計画時」に日本でのパークランへの参加を決めたと回答しており、ほぼすべての調査協力者は、日本での観光プランを計画する段階で、パークランへの参加を検討していた。

③日本でのパークランの情報の入手先、④日本でのパークランについての情報入手の困難さ、⑤日本でのパークランについての英語情報入手の困難さ、および⑥日本旅行でパークランに参加することの重要度

情報入手先については、表6に示すとおり、調査協力者のほとんどが「パークラン公式ウェブサイト」および各イベントが運営するFacebookグループなどの「ソーシャルメディア」から日本のパークランに関する情報を得ていた。また、約4分の1は友人・知人からの口コミを情報源として活用していた。割合は高いものの、約1割の参加者はパークランと連携している「5K parkrunner results」などのアプリを利用していた。表7の結果によれば、「日本でのパークランに関する情報入手の困難さ」および「日本でのパークランに関する英語での情報入手の困難さ」の平均値はいずれも2.0を下回っており、情報収集における困難はほとんど経験されていなかった。さらに、「日本旅行でパークランに参加することの重要度」の平均値は4.69と極めて高く、調査協力者の多くが日本旅行においてパークランへの参加を重要視していたことが明らかとなった。これらの結果から、彼らにとって日本でのパークラン参加は旅行の主目的そのものではないものの、旅行経験を構成する重要な要素の一つとして位置づけられていることが示された。

表6 調査協力者の情報入手メディア

情報入手メディア	利用率 (%)
パークランのウェブサイト	87.6
各イベントに特化したソーシャルメディア	73.2
友人・知人の口コミ	23.7
アプリ	9.3
その他	2.1

表7 日本でのパークランに関する情報入手の困難さと参加の重要度

項目	平均値	標準偏差
日本でのパークランに関する情報の入手の困難さ	1.70	.97
日本でのパークランに関する英語情報入手の困難さ	1.86	.99
日本でのパークラン参加の重要度	4.69	.68

⑦日本でのパークラン参加前の不安と期待

表8に示すとおり、日本でのパークラン参加前の不安のうち、「イベントが予定通りに開催されるか不安だった」と「会場にたどり着けるか不安だった」の平均値はいずれも中位点3.0付近であり、全体としては「どちらともいえない」といえる水準であった。参加者はウェブサイトやSNSを通じてイベント開催情報を確認し、会場までのアクセスについてもGoogleマップなどのオンラインサービスを活用していたと推察されることから、これらの点に関して大きな不安を抱いていなかったといえる。また、「日本語が話せないのが不安だった」および「イベントの雰囲気がウェルカムか不安だった」といったイベント参加時の不安に関しては、いずれの平均値も中位点3.0を下回り、特に後者については「まったく不安を感じなかった」という結果であった。これは、参加者の多くが日本以外での豊富なパークラン参加経験を持ち、さらにSNSなどを通じてイベントのフレンドリーな雰囲気を事前に把握していたことによるものと考えられる。一方、イベントに対する

期待については、「日本人のランナーやボランティアとの交流を楽しみにしていた」「自国とは異なる環境のパークランに参加することを楽しみにしていた」「日本でパークランに参加することを楽しみにしていた」のいずれの項目においても平均値が4.0を上回っており、参加者は日本でのパークラン体験に強い期待を抱いていたとの結果であった。

⑧日本でのパークランでの経験に関する6項目

「開催場所にたどり着くのに苦労した」の平均値は1.88と低く、多くの参加者が会場へのアクセスにほとんど困難を感じていなかった。イベントの運営面に関する「適切なコース案内と誘導を受けることができた」および「外国からの参加者を歓迎する雰囲気があった」の平均値は4.0を大きく上回り、運営面での問題はほとんど認識されていなかった。さらに、「日本のランナーやボランティアと交流することができた」「自分の国とは違う環境のパークランに参加できて満足した」「日本でのパークランの経験に満足した」といったイベン

表8 日本でのパークラン参加前の不安と期待

項目	平均値	標準偏差
イベントが予定通りに開催されるか不安だった	3.01	1.52
会場にたどり着けるか不安だった	3.21	1.31
日本語が話せないのが不安だった	2.48	1.34
イベントの雰囲気がウェルカムか不安だった	1.48	.75
日本人のランナーやボランティアと交流することを楽しみにしていた	4.14	1.16
自分の国とは違う環境のパークランに参加することを楽しみにしていた	4.49	1.13
日本でパークランに参加することを楽しみにしていた	4.48	1.17

表9 日本でのパークランでの経験と満足度

項目	平均値	標準偏差
開催場所にたどり着くのに苦労した	1.88	1.17
適切なコース案内と誘導を受けることができた	4.45	1.06
外国からの参加者を歓迎する雰囲気があった	4.77	.70
日本のランナーやボランティアと交流することができた	4.57	.76
自分の国とは違う環境のパークランに参加できて満足した	4.77	.74
日本でのパークランの経験に満足した	4.79	.74

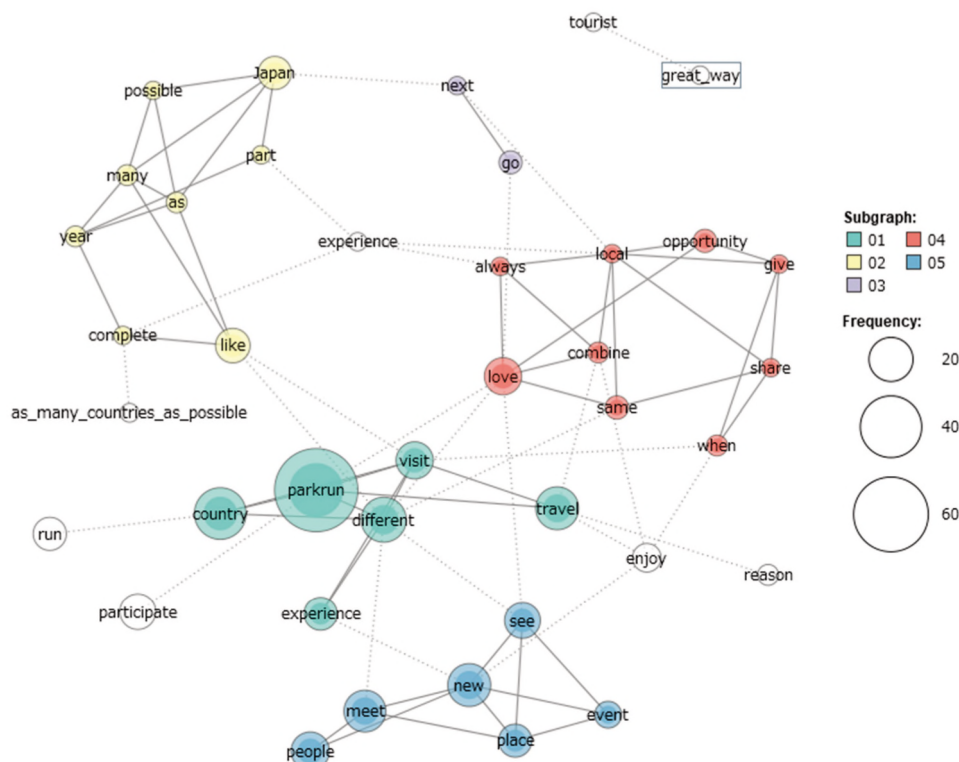
表10 今後のパークランへの参加と友人への推薦

項目	平均値	標準偏差
また機会があれば日本でのパークランに参加したい	4.71	.69
日本以外の外国でのパークランに参加したい	4.88	.53
日本でのパークランについて、友人に勧めたい	4.88	.53

は、parkrun (75回)、country (28回)、different (21回)、new (19回)、travel (19回)、meet (18回)、people (15回)、love (14回)、visit (14回)、participate (13回)、see (13回)、like (12回)、Japan (11回)、experience (11回)、place (11回)、run (11回)であった。続いて、出現頻度が3以上の語を分析対象として、共起ネットワークを作成したところ、図2の通り、5個のサブグラフが抽出された。サブグラフ1は、「parkrun」、「different」、「country」、「visit」、「experience」という5つの語句で構成されており、旅先の異なる国でのパークランの経験を重視している内容を示すものであった。サブグラフ2は、「complete」、「like」、「many」、「possible」、「Japan」などの8つの語句から構成されており、多くのパークランに参加したいとの意向に関連するもので、日本での旅行でもその目的を果たしたいというものであった。サブグラフ3は、「go」、「next」という2語のみから構成されていたが、自由記述の内容を参照すると、次回の旅行でもパークランに参加したいという意思に関連するものであった。サブグラフ4は、「combine」、「love」、「same」、「share」、「opportunity」、「local」など9つの語句から構成され、旅行とパークランの組み合わせを好んでおり、地域の人々と同様に

今後のパークランへの参加に関する3項目:「また機会があれば日本でのパークランに参加したい」「日本でのパークランについて友人に薦めたい」「日本以外の外国でのパークランに参加したい」の平均値はいずれも4.5を上回っており、再参加意図と推奨意図のいずれも非常に高い水準であった。

自由記述データについてKH Coderを用いて形態素解析を行った。分析にあたっては、使用しない語として「be, not, it, that, how, have, they, do, I, my, we, also, there, more, very, try」の16個の語句を除外し、「parkrun alphabet challenge, as many countries as possible, great way」の3語を強制抽出した。その結果、総抽出語は1,171語（使用：674語）、異なり語は314語（使用：252）が抽出された。出現回数が10回以上の類出語



– 21 –

ニングという趣味を通じて交流することを楽しんでいるという内容に関連するものであった。最後のサブグラフ5は、「new」、「people」、「place」、「event」、「meet」など6つの語句から構成されており、新しい場所の、新しいパークランイベントで、新しい人々と出会うことを重視しているという内容に関連していた。以上の分析結果より、頻出語としては「parkrun」を中心に、「country」「travel」「visit」「experience」「meet」「people」など、旅行や他者との交流を示す語が多く抽出され、パークランが単なる運動機会にとどまらず、旅行体験や社会的交流と強く結びついていることが示唆された。共起ネットワークからは5つのサブグラフが抽出され、第一に、異なる国を訪れ、それぞれの地域でパークランに参加する体験そのものを重視する傾向が確認された。第二に、できるだけ多くのパークランに参加・達成したいという志向が示され、日本での旅行においてもその目的を果たそうとする動機が見られた。第三に、次回以降の旅行でも継続してパークランに参加したいという将来的志向が示唆された。第四に、旅行とパークランを組み合わせることへの好意や、地域の人々と同じランニングという共通の趣味を通じて交流することを楽しむ姿勢が明らかとなった。最後に、新しい場所で新しいイベントに参加し、新しい人々と出会うことを重視する認識が抽出された。これらの結果から、パークラン観光は「移動・達成・継続・交流・新規性」といった複数の要素が重層的に結びついた実践であり、参加者にとっては観光体験と社会的つながりを同時に創出する重要な機会となっていることが示されたといえる。

総合的議論

今回の調査協力者には、パークランへの参加回数が10回未満の者も約2割存在していたが、全体の約3分の2は参加回数が100回を超えており、さらに8割以上が5年以上の参加経験を有していた。したがって、本調査の参加者は、パークランに非常に熱心に関与している層であったといえる。彼らの強いパークラン参加動機は、日本旅行においてパークランを重要なアクティビティの一つとして位置づけることにつながっていたと考えられる。実際、旅行計画段階から日本国内でのパークラン開催情報を収集し、旅行日程に組み込んだうえで来日していることが明らかとなった。彼らは日本でのパークラン参加に対して事前の不安が低

く、イベントに対する期待は高かった。そして実際の参加を通じて、ランニングやボランティアとの交流などにより、その高い期待を十分に満たす経験を得ていた。こうした経験は、今後の海外でのパークラン参加意欲を高めるとともに、友人への推奨意向にもつながっていた。

パークランの大きな魅力は、事前予約を必要とせず、会員登録のみで世界中どのイベントにも気軽に参加できる点にある。旅先でパークランに参加し、現地の参加者やボランティアと交流することは、旅行の魅力を構成する重要な要素として機能しているといえる。また、海外からの参加者と共に走り、イベント後に交流を行うことは、地元の参加者やボランティアにとっても楽しみの一つとなっていると考えられる。今後の課題としては、日本以外の地域における旅行者の行動との比較検討が求められる。また、本研究では旅行およびパークラン参加経験について事後的に回答を得たため、記憶のバイアスなどの影響を完全には排除できていない。したがって、今後は実際の旅行中の外国人旅行者に協力を得て、経験サンプリング法に基づくデータ収集を行う工夫などが必要とされる。

引用文献

- Ashdown-Franks, G., Sabiston, C. M., Stubbs, B., Atkinson, M., Quirk, H., Bullas, A., & Haake, S. (2023). parkrun participation, impact and perceived social inclusion among runners/walkers and volunteers with mental health conditions. *Psychology, Health & Medicine*. <https://doi.org/10.1080/13548506.2023.2185643>
- Exodus Travels (n.d. a) Alphabet parkrun Tourist <https://www.exodus.co.uk/insights/alphabet-parkrun-be-global-parkrun-tourist>
- Exodus Travels (n.d. b) Explore the world with parkrun <https://www.exodustravels.com/insights/reasons-combine-parkrun-your-adventure-holiday>
- Grunseit, A., Richards, J. & Merom, D. (2018). Running on a high: parkrun and personal well-being. *BMC Public Health* 18, 59. <https://doi.org/10.1186/s12889-017-4620-1>
- Haake, S. (2018). Parkrun: a new model of physical activity for large populations?. *The Sport and Exercise Scientist*, 57, 18-19.

- 石盛真徳 (2024). 世界各国におけるパークランの普及状況と研究動向に関する考察—ランナーとしての参加経験を踏まえて— 追手門経営論集, 30(2), 1-13. <https://doi.org/10.69274/105241201>
- Jones, E. (2023). p is for parkrun: a journey from A-Z. Gritstone Publishing.
- King, A. (2021a). A-Z of parkrun Tourism Asia Pacific. Runs with a Barcode.
- King, A. (2021b). A-Z of parkrun Tourism UK & Ireland. Runs with a Barcode.
- McKendrick, J. H., Bowness, J. & Tulle, E. (2020). In search of parkrun tourism: destabilising contradictions or progressive conceptual tensions? *International Journal of Culture Tourism and Hospitality Research*, 17, 14, 335-347. <https://doi.org/10.1108/IJCTHR-10-2019-0183>
- 中川真輝・宮岸凌也・中村圭汰・高井優紀・山岡祐貴・萩谷洋紀・樋野公宏 (2024). 日本におけるパークランの参加者の属性と類型化—参加者へのアンケート調査より— 日本都市計画学会都市計画報告集, 23, 305-311. https://doi.org/10.11361/reportscpij.23.2_305
- parkrun.com (2017). Exodus Travels are official partners of parkrun. Retrieved November 15, 2025, from <https://blog.parkrun.com/uk/2017/07/21/exodus-travels-are-official-partners-of-parkrun/>
- parkrun.com (2025). Our story. Retrieved November 15, 2025, from <https://www.parkrun.com/about/our-story/>
- parkrun Japan (2025). parkrun っ て 何? Retrieved November 15, 2025, from <https://www.parkrun.jp/>
- Reece, L.J., Quirk, H., Wellington, C., Haake, S. J. & Wilson, F. (2019). Bright spots, physical activity investments that work: parkrun; a global initiative striving for healthier and happier communities. *British Journal of Sports Medicine*, 53, 326-327.
- Quirk, H., Bullas, A., Haake, S., Goyder, E., Graney, M., Wellington, C., Copeland, R., Reece, L., & Stevinson, C. (2021). Exploring the benefits of participation in community-based running and walking events: a cross-sectional survey of parkrun participants. *BMC Public Health* 21, 1978. <https://doi.org/10.1186/s12889-021-11986-0>
- Renfree, G., & West, J. (2021). Motivation and commitment of volunteers at parkrun events. *Managing Sport and Leisure*, 29, 56-69. <https://doi.org/10.1080/23750472.2021.1986120>
- Schneider, P. P., Smith, R. A., Bullas, A. M., Bayley, T., Haake, S. S., Brennan, A. and Goyder, E. (2019). Where should new parkrun events be located? Modelling the potential impact of 200 new events on socio-economic inequalities in access and participation. *MedRxiv*, p.19004143.
- Stevinson, C. & Hickson, M. (2013). Exploring the public health potential of a mass community participation event, *Journal of Public Health*, 36, 268-274. <https://doi.org/10.1093/pubmed/fdt082>
- Stevinson, C., Wiltshire, G., & Hickson, M. (2015). Facilitating participation in health-enhancing physical activity: a qualitative study of parkrun. *International Journal of Behavioral Medicine*, 22, 170-177. <https://doi.org/10.1007/s12529-014-9431-5>
- 東條秀祐・衣笠匠斗・樋野公宏 (2024). 日本におけるパークランの会場特性と参加実態—国際比較と国内会場の分析— 日本都市計画学会都市計画報告集, 23, 286-292. https://doi.org/10.11361/reportscpij.23.2_286
- van Rheenen, D., Cernaianu, S. and Sobry, C. (2017). Defining sport tourism: a content analysis of an evolving epistemology. *Journal of Sport & Tourism*, 21, pp. 75-93.
- Wiltshire, G. R., Fullagar, S., & Stevinson, C. (2018). Exploring parkrun as a social context for collective health practices: running with and against the moral imperatives of health responsibilisation. *Sociology of Health & Illness*, 40, 3-17. <https://doi.org/10.1111/1467-9566.12622>